

グアテマラと日本をつなぐ 第14回

カリフォルニアでのマヤ民族衣装ファッションショー

小林愛子（タペストリー作家：米国在住）

私達が住んでいる北カリフォルニアの公立高校に通っている娘が、スペイン語の先生からの情報で、グアテマラのための寄金集めの昼食会があると聞いて来た。場所は裕福な地域にある大きな白人キリスト教会だ。

グアテマラ生まれの娘の高校卒業レポートが＜グアテマラについて＞だという事とゲストスピーカーは、映画＜エルノルテ＞の原作者であるグアテマラ人小説家アルトゥーロ・アリアスだという事もあり、ともかく家族三人で参加することになった。

テーマは『今日のグアテマラの生活』。彼は、政治の話はもちろん、文化、歴史となかなかの学者で雄弁家、色々な方向から見ることのできる柔らかい感性を持つ魅力的な人だと思った。

文化、宗教や人々の今の生活にはあまり感心がないという運動家にありがちな一方的な物の見方、あるいは政治にうとい一部の文化人類学者とは違って、総合的に物知り博士で自分の視点を冷静に掘り下げるやはり小説家の目を持った人なのだろう。

様々な侵略者によって翻弄された歴史の中で、どのようにこれから希望の持てる国となるのだろうか注目したいという余韻が残る話だった。グアテマラに住んでいた時に、ロイター通信のカメラマンだった夫デニスも彼とはもっと政治の話をしたかった様子だった。

このオーガナイザーは、アルトゥーロとはグアテマラ・シティーのインターナショナル・スクールの同級生、すなわち幼馴染みだったというグアテマラ人女性イビスであった。そしてまた別の日には、寄付金集めのディナー・パーティーがあり民族衣装のファッションショーをする計画だとわかった。

その時、私の20年に渡るグアテマラの民族衣装のコレクションをちょっと自慢したくなった。それがそもそもの間違いだった。イビスは、速攻で数日後には私の家にコレクションを見に来て、あつというまに全面的に協力、衣装を貸すことになった。

会話の中でわかったイビスの家柄は、父親方も母親方もかなりのハイソの出身。と言う事は何も先住民の文化、衣装について興味の無い生活を送っていた事になる。召し使いとしてのインディヘナの衣装だから。そして思った通り後日驚きの連発になるのである。民族衣装について誰も何も知らなかったのだから。

とりあえず彼女がグアテマラで集めたものとイシル博物館で働いていた事があるという人から借りたものを見せてもらって驚いた。組み合わせも地名もでたらめ。かろうじてコバンとサンティアゴ・アティトランの男女のセットは使える。

こんな状態でファッションショーをやろうとしていたのだから。これを見た時に『しまった！とんだ事に関わる事になりそうだ』と思ったがもう遅かった。しかも、日本人である私の言うことを最初は全く信じようとしなかったのであるから、文献を持参しての説明であった。

それから何日彼女の豪邸に通っただろうか。20着の選別、順番、各村の解説をナレーターする白人女性ジャンに語り続けるはめになった。ちょっとした無料大サービス講義だ。

モデルとの衣装合わせの日はどうしても来てくれと言うので行ってみて驚いた。約束してあったと言う

高校生のモデル達は三人しか来なかったのだから。しかもこの子たちのほとんどは夏に行くグアテマラのボランティアツアーに参加するとか。心の中で<チッ、だから金持ちの子は困るんだよ>とわたしの金持ち偏見主義が頭をもたげた。そして<この企画はどうなるんでしょうか？イビスさん>と心の中でつぶやきながらジャンと目配せした。

そして私は自分でモデルを集める事にした。だってわたしの大事な宝ものを着せるんだら。まず娘にはメキシカン・レストランでのバイトがあるからと冷たく断られた。うちに下宿している16才のスペイン人のグローリアと友人アンジェリーナ（オアハカ生まれでお父さんはチェロキーインディアン）、アリソン（中国系）アヤ（日本人）、そして日本から友人の家に来たばかりのマサハルが快く承諾してくれた。この五人には、私のコレクションのとびきり良いものを着せたのはもちろんである。

アンジェリーナには内戦が激しかった、イシル・トライアングルの3カ村の1つ、チャフルの衣装。全身赤で統一されている中、稀少価値である大判で端の方に小さく可愛い柄が縫取り織りされている藍のストールを右肩にかける。頭には縫取り織の柄がびっしりと入った赤い頭飾りをぐるぐると巻き、そして丸いボンボンの6個が額の上でぴしっと決まっている。小麦色の肌に赤が映え高貴な雰囲気、まるでマヤの時代から抜け出して来たかのように美しい。

アリソンには<ユニティ>として平和と自由の象徴になってもらった。これは頭飾りからウイピール（ブラウス）、コルテ（巻スカート）、帯にいたるまでさまざまな村のものから選んでいる。内戦時代どこから来たのか一目瞭然の衣装は、出身地を表わす大切な身分証明でもあったが、今内戦が終わって10年、美しい他村の衣装を着る女性も多くなった。お金を出せば買える時代になったのはさみしい気もするが彼等にとっては自由の羽ばたきであろう。

手織りのグリーン色の布に花柄の刺繍をしたウイピールにコルテはグリーンやピンクの入った華やかなもの。全体を明るく楽しい感じにまとめた。そして、赤い織模様の入った帽子をかぶった赤ちゃん人形を大きな手織りのおくるみで包み肩から下げてもらい18才のママとなった。

アヤには、私が初めて織り物を習ったサン・アントニオ・アグアス・カリエンテスの衣装を。高度な技術である二重織の部分は全くのリバーシブルになっている。わたしの織りかけの棒織のセットを抱え、頭にのせる布は友人のクリスティーナに織ってもらった鮮やかなエメラルドグリーン、房飾りは休火山を表わすように丁寧に編み込んである。彼女はわたしの友人エミの娘さん。

エミはグアテマラ生まれのメキシコ育ち、中学から日本の教育を受けたという三か国語ネイティブの珍しい日本人だ。5年前にこちらで彼女と知り合った時に、その生い立ちをとて信じられなかったものだ。最初モデルは嫌だと言っていたアヤもすっかりサンアントニオの18才になりきっている。

グローリアにはサンタ・カタリーナ・パロポのブルーのウイピールを着てもらった。このウイピールとの出会いは、アンティーグアの織り物の土曜市だった。見た瞬間に気に入ってしまったが、売り手のしたたかなおばちゃんは、これ又一瞬のうちにわたしの全身から欲しがっているオーラを見抜き、どんなにねばっても売り値を下げてくれなかった。

ところどころ紫、ピンク、オレンジなどが入り、全体の色合いは強めの水色でびっちり猫等の動物が縫取り織されている。技術はそこそこだけれど織り手のおおらかな性格が伝わってくるような、熱さがある。まるで油絵の重ね塗のようなぼてっとした重量感が気に入っている。頭飾りは、ブルーのラメ入りのたっぴりとした布をオアハカの飾りひもを扱いなれているアンジェリーナが上手にターバン風に巻きつけ

てくれた。黒白の緋のストールを肩にかけ、カーラの白い花を抱えた姿は、これまたスペインの中世の絵から抜け出たようなあでやかな16才のグローリアだった。

18才のマサハル、彼は日本からサンフランシスコに到着した日にモデルをお願いした。チョコットはえてる口ひげやあごひげがソロラのお兄さんにぴったりだったから。赤を基調にした7分丈のパンツは、細かい緋の縞が入っている上に強い色やラメ糸で縫取り織で模様を入れてあるこったもの。そして手織りのサッシュを巻き、ジャケットは中世のスペインの羊飼いの服装から来たと言う黒のウール。背中には村の紋章であるコウモリ模様がテープでつけてある。この姿でソロラの男性が、くわを持って畑仕事をしているのを初めて見た時は、本当にその鮮やかさに感激したものだ。

そして頭には、赤が入った縞柄の年代物の布を巻いてもらった。これは、ソロラの市でいつも寄っている布屋のおじいさんの店で、奥さんが持っていた籠にかけられていたもの。売り物ではなかったが、茶綿の手紡ぎの糸が入り赤と藍色のあせ具合といい、とても気に入って無理にゆずってもらった物。そして小道具にネギの入った籠を持ってもらった。

その他のモデル達にも衣装は貸したのだが、一番えこひいきしているこの五人は格別に引き立ったと思っている。

ともかく大成功。各々の頭飾りの巻き方も本を見て調べておいたので戸惑うこと無くできた。ちょっと自慢したい位上出来だ。

私のコレクションがこんな風に日の目を見せ、グアテマラに還元できるなんてうれしいことだと疲れもふっ飛んで行った。

イビスが手配してくれたグアテマラ人の二人の女性アシスタントは白人に近い都市型ラディーノ(混血)のせい全く役に立たなかった。メチャクチャに着つけてくれたのでやり直すのかえって大変。一瞬むっと来たけれど、でも<怒れないな - >とすぐ思った。

なぜなら、グアテマラの衣装にいくらわたしが詳しくても、日本の着物を人に着せてあげられないし、自分では着れない役たたずの日本人だから同じ事だろう。

タペストリー作家 小林グレー愛子(カリフォルニア在)